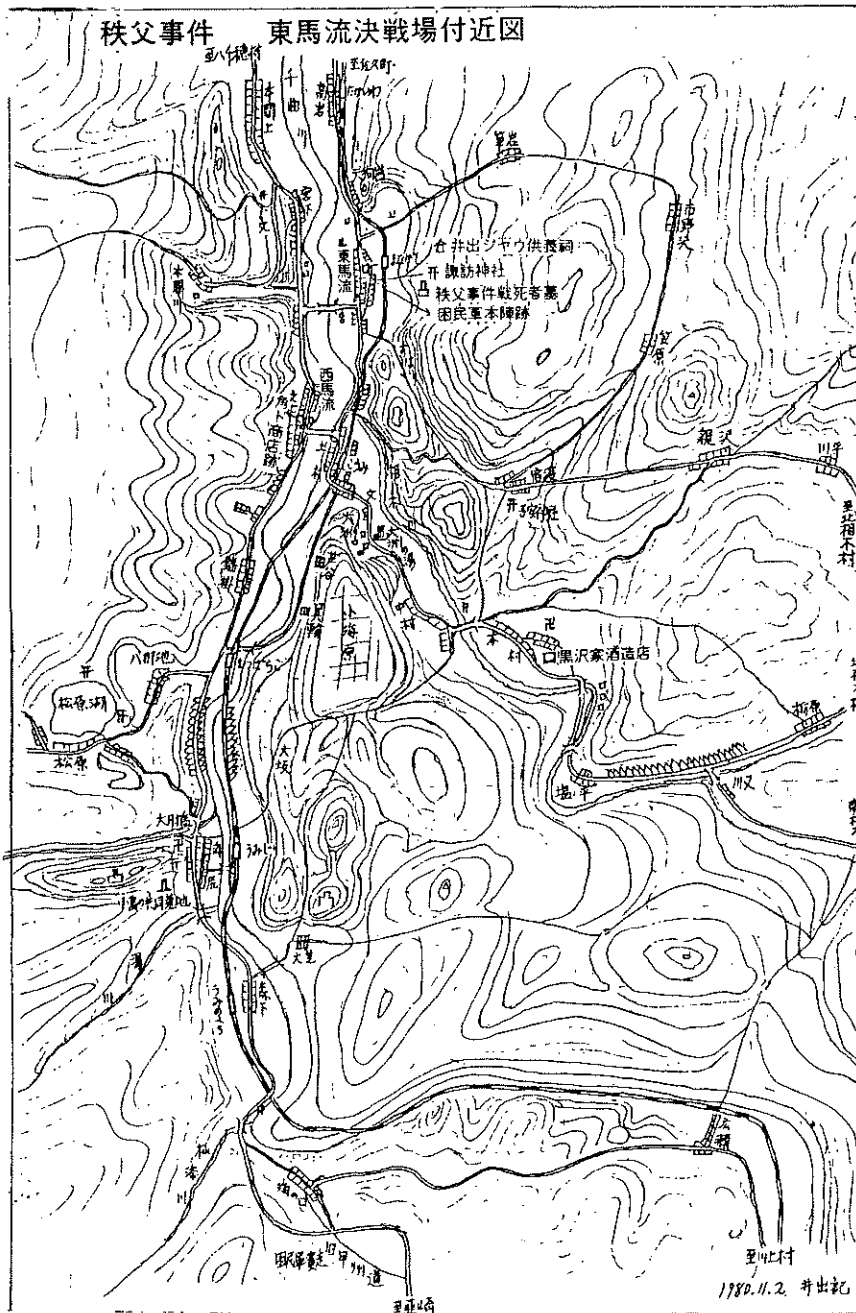




# 佐久からみた 秩父事件

長野県南佐久郡小海町  
小海町教育委員会  
小海町文化財調査委員会  
小海町東馬流区





**表紙説明 東馬流区と「秩父暴徒戦死者之墓」**

秩父事件、最後の決戦地となった小海町東馬流区、前方右側の台地から銃撃をうけ困民軍に犠牲者が出た。戦死者の墓もここにある。

**東馬流の戦闘の戦死者、犠牲者**

困民軍戦死 13人

内 佐久郡 4人

高野町 大日向 平川原

倉沢米吉 37才

高見沢儀四郎 21才

日向留作 23才

小須田 与作 54才

長野県外 9人

埼玉県秩父郡風布村

大野喜十郎 20才

群馬県甘楽郡藤岡市上日野

山田鉄五郎 35才

東馬流の犠牲者

井出ジャウ 30才

(井出宗作の妻)

警察官の損傷

長野県巡査 桑梨角之助

(元松代藩士)

腹部銃傷 15日死亡

警部補に昇進

善光寺に埋葬

軽傷 1名

軍人の損傷 なし

**菊池貫平は**

小海町八那池、小池米吉の

三男 小池米吉の長男は藍

平 (現在は盛男氏)

元治元年 (1864)

北相木村菊池嶋之助の養子

となる。

**佐久からみた秩父事件**

著者 井出正義 (1918~2010)

# 佐久からみた秩父事件

## 秩父事件関係年表

- 明治14年 10月 明治23年に国会を開く旨の詔勅発布。自由党できる。  
(1881) 松方財政はじまる。(デフレ政策)
- 明治15年 1月 軍人勅諭発布。  
(1882) 11月 福島事件おこる。
- 明治16年 3月 高田事件おこる。  
(1883) 12月 秩父の農民、高岸善吉・坂本宗作・落合寅市の3人、秩父郡役所に、負債支払を延期するよう、高利貸説論を請願する。
- 明治17年 2月 大井憲太郎、秩父で演説会。(自由党入党者続出)  
(1884) 3月 自由党大会に秩父の村上泰治・高岸善吉出席。  
5月 群馬事件おこる。  
6月 照山俊三殺害事件で村上泰治逮捕される。  
8月 困民党の山林集会はじまる。  
9月 田代栄助、困民党に参加。  
23日 加波山事件おこる。  
30日 困民党総代大宮郷警察署に、高利貸説論を請願。
- 10月 高利貸に集団交渉。  
12日 困民党幹部が蜂起決定。  
20日 信州北相木村の自由党員に連絡。(使者、剣士萩原勘次郎)  
22日 大井憲太郎、蜂起中止説得のため氏家直邦を秩父に派遣。  
25日 菊池市三郎、同恒之助が萩原勘次郎と秩父に同行。  
26日 栗野山会議、11月1日蜂起と決定。  
27日 門平惣平、飯塚盛蔵が市三郎、恒之助を同行して北相木にくる。  
28日 菊池貫平、井出為吉が秩父に潜入。  
29日 大阪で自由党解党式行なわれる。  
30日 菊池貫平・井出為吉、困民党総理田代栄助と会談。  
31日 風布村で困民党結集、吉田方面に向かう。夜、新井周三郎ら皆野村永保社襲撃。
- 11月 1日 阿熊溪谷で困民隊が警官隊と交戦、清泉寺前で激闘。下吉田村戸長役場包囲戦、下吉田村棕神社に集合。困民軍編成、参謀長菊池貫平、軍律五ヶ条起草、井出為吉軍用金集方、困民軍小鹿野に侵入。  
2日 困民軍大宮に侵入、郡役所占拠。  
3日 困民軍皆野に進出、東京憲兵隊寄居に到着、親鼻渡の銃撃戦。  
4日 警官、憲兵隊、秩父周辺諸口の警備体制を固める。粥仁田峠の戦闘。午後4時ごろ皆野本陣解体、田代栄助ら逃亡。鎮台兵1個中隊児玉町に到着、夜、金屋の激戦。菊池貫平らは上吉田村塚越で野営、信州進出をきめる。  
5日 菊池貫平を総理とする困民軍、山中谷に侵入、神ヶ原に宿陣。警官隊、

憲兵隊は大宮に向かって一斉に進入。

- 6日 困民軍、白井に宿陣。
- 7日 困民軍、十石峠を越え、大日向村竜興寺に宿陣。途中十石峠で捕虜の前川巡查を殺害。
- 8日 困民軍、海瀬、高野町、崎田等を経て、東馬流宿陣。高崎鎮台兵、夜に白田に到着、岩水で仮眠。夜困民軍、大洲、本村、西馬流の黒沢三家打ちこわし、南北相木村に駆りだし
- 9日 未明、東馬流の戦い、困民軍戦死13人、東馬流の婦人犠牲者（死亡）1、警官重傷2人、(内1名死亡)、憲兵隊海の口に追撃、困民軍解体、野辺山高原に逃走。官兵食糧基地を土村に進め、残党、参加者の検挙始まる。

## 戦前は「秩父騒動」「秩父暴動」とよばれていた。

それは現状に不満な農民、博徒、獵師らが、集団をつくって、役所や警察署を襲い、高利貸や富豪を打ちこわして金品を略奪し、軍隊と戦った恐るべき暴動であったとされていた。

## 戦後、その見方と評価が改められた。

この事件は、明治政府のデフレ政策によって生じた繭価の大暴落によって窮乏に落ちいった秩父の農民が、自由民権運動に指導のよりどころを求めて、困民党を結成し、借金の長期年賦償還等を請願したが入れられず、明治17年11月1日、ついに武装蜂起したものである。

## 秩父事件はなぜ起きたか。

**農民の負担が過重だった。**明治維新からわずか10数年、明治政府は工場・鉄道を建設し、学校を設置し、軍備を充実して、外国にはやく追いつこうと近代国家の建設を急いだ。しかしその財源は地租をはじめ、すべて農民の税にたよるほかなかった。つまり富国強兵という急激な近代化政策のしわよせが、すべて農民の肩にかけられていた。

**明治14年、松方大蔵卿が西南戦争に増発した紙幣整理のために行ったデフレ政策は、金づまりをきたし、生糸相場の大暴落を起こした。**そのため、平地が少なく、養蚕と座繰製糸にだけ頼っていた秩父の農民は、たちまち窮乏におちいってしまった。

**困った農民は、高利貸から金を借りるよりほかなかった。**政府は救済資金の低利貸し付け等の処置をとらなかった。当時金融機関といえば高利貸よりほかなかった。

高利貸の利息は切金貸、月縛りなどという方法で、一年間に倍以上になってしまうものであった。明治11年に政府は利息制限法で年2割ときめていたが、まったく守られていなかった。農民は身代限りをして、逃亡するものが続出した。

**16年12月** 高岸善吉、坂本宗作、落合寅市の3人の農民が、高利貸の暴利を取りしまってもらおうと郡役所へ最初の「高利貸説諭請願」を行った。

**17年2月** 自由党の幹部（左派）大井憲太郎が秩父にきて政談演説会を開いた。藩閥専制の現政府を打倒して、自由党によって議会政治を実現し、地方農民の負担を軽くしようという大井の演説は秩父農民の心をとらえ、たくさんの入党者ができ、3月には自由党大会に代表を送った。

8月・9月にかけても、農民たちは高利貸に個別交渉するとともに、郡役所や警察署長に対しても「高利貸説諭請願」「負債据置年賦償却説諭の義」等の請願活動をつづけたが、「貸借は証書があり、監督官庁が介入すべきではない」と却下されてしまった。

## 武力蜂起の決定

合法的な交渉、実現の道を断たれてしまった農民は、困民党を結成して、高利貸打ちこわしを当面の目標にして武力蜂起することを決定した。

群馬県・長野県等の周辺地方によびかけて一斉蜂起すれば、その波紋はたちまち全国に広がるだろう。そこで自由党と協力して専制政府を転覆して、自由党総理板垣退助を中心とした政治改革を実現しようとするものである。

9月、困民党は秩父地方で人望があつて、俠気にすぐれた親分、田代栄助と加藤織平を幹部に迎えて、総理、副総理とした。

弾薬の製造、軍用金や武器の調達を行ない、党員の組織活動は耕地ごとに進めた。

このような危険な事態を防ぐ方法はなかったのか…「高利貸にも説諭を加え、負債主方を一時各自の家に帰って業につくようにすれば、このようにはならなかつただろう」（秩父暴動雑録）と、事件蜂起の中心地において、しかも冷静な目で事件をみつめていた神官の田中千弥が書いている。

自民党本部からの蜂起阻止説得使、秩父から状況報告を受けた自由党本部の大井憲太郎は、成功の困難を察して、氏家直邦を秩父に派遣して蜂起阻止を説得させようとした。しかし秩父の状況に接した氏家は、これを阻止することのできないことを知った。

自由党解党、集会条例等による政府の締めつけの強化と、相つぐ地方の激化事件、自由党内部の左右の対立等によって、党の統制力を失った自由党は、10月29日に大阪で解党式をしてしまった。

### 周辺各地方への参加のよびかけ

西上洲、多胡日野谷方面に、小柏常次郎らがオルグ

信州、北相木村へ、小野派一刀流の劍客萩原勘次郎が連絡にくる。



現在の十石峠は国定公園になっている

## 北相木村の人たちがなぜ参加したのか。

秩父にもっとも近い村。 梅峠は馬が通れる。

上州、秩父方面との生活の交流が深かつた。

耕地のせまい北相木村は、馬方、行商、出稼ぎが多かつた。→上州・武州→東京・横浜へ

農外収入にたよる、一商品経済の比率が高い。一国の財政による、好況、不況の波をうけやすい。山村ではあるが、学者や偉い坊さんが昔からでている。

井出為吉は佐久でもっともはやい自由党員の一人

東京で学問をし、当時のもっとも新しい、すぐれた書物を学んでいる。

北相木村啓文学校の先生となり、21歳で村会議員、25歳で戸長になり、農村窮乏の原因が政府の政策の矛盾にあることを身にしみて知った。

為吉の周囲には、村のすぐれた青年たちが集まって、学習会を開いた。山村の新しく生きる道を求めていた。

高見沢薫は18歳で師為吉とともに入党し、小諸の演説会に参加して雄弁をふるい、20歳で地租軽減建白書を提出し、「卓窟全治自由論」という書物を書いている。その他井出代吉、山口糸之助、菊池市三郎、同高三郎、同恒之助、高見沢仙松などの人々がある。いずれも将来北相木村の村政を担う人々である。

**菊池貫平**はまた、**岩村田裁判所の代言人**として、人生の表裏に通じ、才気縦横、なんでもこなす胆略のある頼りになる男であった。

このような北相木自由党は小諸、岩村田、前山等につぐ、佐久自由党の拠点であった。

**9月**、秩父から小野派一刀流の剣客萩原勘次郎がきて、北相木村に滞在して、剣道指南をしながら秩父困民党団結の状況話を話していった。

当時は農民も自由に剣術が学べるようになり、たいへん盛んであった。北相木の青年たちは、学問、武芸の両道にはげんでいたのである。

**10月20日** 萩原勘次郎がいよいよ困民党の蜂起決定を知らせ、北相木自由党の参加要請の使者として為吉方にやってきた。北相木では井出代吉を萩原に同行させ、つづいて25日、菊池恒之助と市三郎が出発し、途中で代吉の戻るとの出会い、26日夜栗野山会議に出席した。

**10月27日** 秩父から門平惣平（事件の伝令使）、飯塚盛蔵（同乙隊長）が恒之助、市三郎と同行してさいごの連絡にきた。同日いきちがい菊池貫平と井出為吉が出発した。

井出為吉からの連絡をうけて、元戸長の木次嘉一郎を含めて北相木自由党員が秩父に向かって出発したのは11月3日であった。秩父で困民党の敗戦となったため、彼等は途中で群馬県甘楽郡を経て相木に戻った。

おくれて一人で出発した菊池恒之助だけが秩父に至り、貫平の軍に加わって佐久に入った。

## 井出為吉、菊池貫平の事件参加の態度

**10月28日夜** 副総理加藤織平宅に泊る。

**10月29日** 田代栄助不在のため、北相木村出身山口富吉宅に泊る。

**10月30日** 総理田代栄助と会見

為吉「国会期限を短縮する請願を致さんと思うにつけ来たのだが…借金党にて…場合によれば大家を潰す積りと申すにつき、帰国せんと答うるに…」 栄助「比場合に至り、たとえ外人（よそびと）たりとも返すことは相ならず」と申すにつき…。

織平宅では集まった人々三、四十名位に書面を読み聞かせた。その中に、国会を早く開くこと、租税の減額、金利15円1分を25円1分に引下げる。その他みな百姓のありがたく思う事のみがあった。

貫平「現政府の施政が悪い、人民かくの如く蜂起せしは23年の国会を待ち兼ねてのこと、11月1日は全国蜂起し、現政府を転覆して、直に国会を開く革命の乱である」と新道工事の監督を説得している。 参謀長就任は自薦であった。

## 一斉蜂起論

10月30日 小前会議（上日野沢村小前）で11月1日蜂起決行がきまった。

関東甲信地方一斉蜂起が必要であるとする田代栄助は1ヶ月延期を提案し、井上传蔵がこれを支持した。

即時決行を主張する小柏常次郎らと鋭く対立した。大勢は11月1日決行ときまった。

菊池貫平は、全国一斉蜂起の必要を知り、その可能性を信じていただろう。信州転進はそうした信念の上に行なわれたと思われる。

## 武装蜂起

10月31日夜 風布村が行動を起こす、ほとんど全村参加、大野苗吉、長四郎ら本隊(130人)→  
椋神社

先発隊大野福次郎ら途中で捕縛。 大野喜十郎東馬流で戦死。

新井周三郎ら金崎村金貸会社永保社襲撃。

11月1日 下吉田村清泉寺、役場で警官隊と戦闘。 新井周三郎、捕虜の窪田巡查を斬る。

官吏殺害、合法主義崩壊。 青木巡查捕虜となる。

午後4時ごろ下吉田村椋神社に集結1,000余名。

### 困民軍の役割発表

総 理 田代栄助 大 宮 郷

副 総 理 加藤織平 石 間 村

会 計 長 井上传蔵 下吉田村

〃 宮川津盛 上日野沢村

会計長兼大宮小隊長 柴岡熊吉 大 宮 郷

参 謀 長 菊池貫平 北相木村

甲大隊長 新井周三郎 西ノ入村

甲副大隊長 大野苗吉 風 布 村

乙大隊長 飯塚盛蔵 下吉田村

乙副大隊長 落合寅市 〃

伝 令 使 6人

軍用金集方 井出為吉 北相木村

宮川寅五郎 静岡県浜松

兵 糧 方 3人

弾 薬 方 2人

小 荷 駄 方 2人

銃 砲 隊 長 2人

小 隊 長 10人

村単位に編成、村名を墨書した小旗を持つ。

田代栄助は参謀長の人選に最も苦心していた。

参謀長は全軍の統率、作戦指揮の中心。菊池貫平はじぶんから参謀長をかってでた。

一般困民兵の服装は

筒袖、股引き、わらじばき、白鉢巻、白だすき

小隊長以上は

紋付羽織、袴に帯刀



菊池貫平

### 軍律5ヶ条を発表 参謀長菊池貫平の起草

第1条 私に金品を略奪する者は斬

第2条 女色を犯す者は斬

第3条 酒宴を為したる者は斬



第4条 私の遺恨にて放火其他乱暴を為したる者は斬

第5条 指揮官の命令に違背し、私に事を為したる者は斬

### 困民軍の行動目標

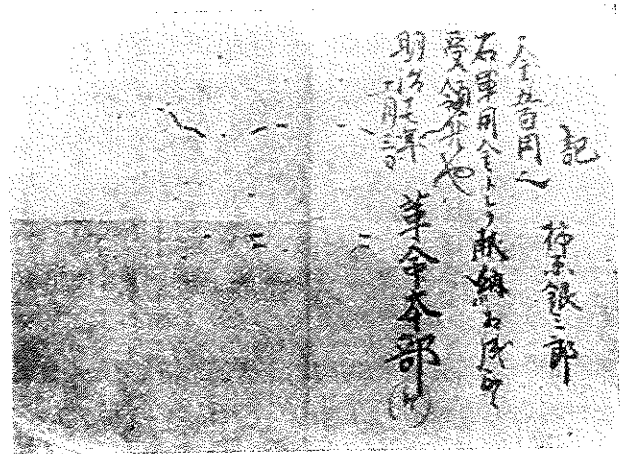
高利貸に賃金の半額放棄・他は据置・年賦返済を交渉し、きかないときは家屋破壊または放火す。

軍用金の献納、武器の供出

警察署襲撃 役場公証簿の焼却

参加者の駆り出し 一戸一名

食糧の炊き出し「もし異議ある者に対しては臨時の手段として放火、殺傷するもまたやむを得ざるなり」



困民軍が軍用金を徴収したとき出した受領書

### 夜8時、甲乙2隊に分かれ、小鹿野に向

かって出発

小鹿野警察分署襲撃破壊、書類焼却高利貸1軒放火、6軒打ちこわし 諏訪神社で夜を明かす。二軒の農家に炊き出しを命じる。

田代栄助「警察官不在の場合は決して破壊するの限りにあらず」と指示してあったのにこれが守られなかったのは「我本意にあらざるなり」

### 11月2日 朝6時 小鹿野出発、大宮に進撃

「新政厚德」の大旗を先頭にたて、整然と一組ごとに隊列をつくり、小隊旗を立て、ほら貝を吹き、ときを揚げ第一に鉄砲隊、第二に竹槍隊、第三に抜刀隊、伝令使、総理と二列縦隊の堂々たる行進であった。

秩父三十四番札所の二十三番音楽寺の鐘を鳴らし、ほら貝を吹いて、武の鼻渡しから荒川を渡って大宮郷に侵入した。

警察署、郡役所を占拠、郡長以下官吏は逃走し、警察は皆野に撤退した。

困民軍本営を郡役所に置いた。これは参謀長菊池貫平の提案である。

このため秩父に困民軍政府ができたような観を呈した。

高利貸征伐 3軒焼き 4軒打ちこわし

軍用金徴集 町内10軒の富豪から2,980円

軍用金集方井出為吉は領収書に「献納」「革命本部」と書いて発行した。(5枚ある)

フランス革命史を読んでいた為吉の心情が推察できる。

埼玉県は内務卿山県有朋に憲兵の出動を要請打電 明治14年憲兵隊創設以来最初の出動である。

### 3日 早朝 困民軍は甲乙、丙3隊に編成

菊池貫平と乙大隊長飯塚盛蔵総勢500人大野原から皆野に進出、角屋に本陣を置く。

午後4時ごろ対岸全崎村に到着した憲兵隊を銃撃して退ける。憲兵隊の銃弾が不発だった。

埼玉県は東京鎮台兵の派遣を要請

さらに憲兵二個小隊を派遣。

困民軍に動揺おきる。

4日朝 甲大隊長新井周三郎、捕虜の青木巡查に斬られ重傷を負い、坂本宗作に大隊長の任を托す 小鹿野に自衛隊ができる。戸長と甲源一刀流逸見多四郎門下で編成(3日)



大宮にも自衛隊ができる。大宮卿の有力者と剣士高野佐三郎が編成（3日）

**午後3時** 秩父の出口は全部軍隊、警察隊で封鎖され、関東甲信一斉蜂起のロマンは消えた。  
困民党本陣瓦解、持病の胸痛を發した田代栄助は、井上伝蔵、島田清三郎、犬木寿作、柴岡熊吉、磯田左馬吉らと軍用金を分配、「山中に潜み、運命を待たん」と姿を消す。

#### 諸隊の活動

金谷の戦闘、（4日深夜）甲隊大野苗吉ら、秩父新道を児玉郡へ進出、金谷で鎮台兵と遭遇戦

秩父事件最大の激戦、「天晴れの剛兵」鎮台兵はじめて村田銃を使用。

困民軍即死6名、収容 死者4名、負傷者9名、軍隊警察の負傷4名

粥新田峠の戦闘、落合寅市指揮、5日7時ごろ、憲兵の攻撃をうけ敗走。

半納の戦闘、甲隊別働隊島崎弥十郎指揮、群馬県警柱野警部補を殺害、前川巡查捕虜。

**4時** 菊池貫平、坂本宗作、稲野又治郎（会津の先生）、らに島崎嘉四郎らの半納戦の別働隊が合流

## 信州進出を決定

**4日深夜** 上吉田村塚越部落の川原で会議 菊池貫平を総理とし、信州に進出をきめる。

副総理 坂本宗作、会津の先生（稲野又治郎）幹部 新井寅吉、小板橋貞吉、横田周作（以上群馬県）

小林酉蔵、島崎嘉四郎、東京の先生（千本松吉兵衛）約150名

**5日** 日尾の谷をのぼって、屋久峠から青梨に進出 神ヶ原の学校に宿営

**6日** 万場方面には自衛隊が結成されていた。魚尾で対戦して困民軍が敗れた。

上流の乙母連合五ヶ村の自衛隊は防戦できず、困民軍に70人位参加した。

白井に宿営、榎原村戸長役場筆生黒沢嘉三郎宅焼打、人足駆出しに効果。

**7日** 十石峠を越えて信州へ 約200~250人

白井峠頂上浅次郎茶屋で昼食、（玉田浅次郎は古谷の人）

十石峠頂上から約200mくだった所で捕虜の前川彦六巡查を殺害、屍は道路下に落す。

戸長役場（平川原）で人足1戸1人、銃の所持人台帳、炊き出しを要求、竜興寺宿泊。

**8日朝** 矢沢の浅川三家（源助、愿三郎、玉之助）打ちこわし、会津の先生、坂本宗作、小林酉蔵指揮。村民多数参加、後実刑者を多くだす。

## 長野県警の対応

### 岩村田警察署、臼田分署、海ノ口交番所

**6日** 群馬県警から長野県下に向かうらしきと打電あり。

早川警部補 巡查20人を十石、余地、矢沢、田口各峠に配置し、梓山に向かう。

十石峠の困民軍行動は巡查斥候によって把握された。

**7日** 杵淵臼田分署長 西の反（そり）の天険に巡查50、猟師20人配置。

県は軍隊に出兵を要請、高崎鎮台に出動命令下る。

**8日未明** 本隊を平林に移し、羽黒山に猟師鉄砲隊配置、さらに下越村・臼田橋に後退、  
稲荷山に猟師20人配置

**午後9時** 高崎鎮台第一大隊第2中隊長吉屋信近大尉兵120名を率い岩村田に到着。

**午後10時** 岩水（臼田町）に至り仮眠4時間

## 地元諸村の対応

7日穂積村戸長井出要蔵は8

日午前1時まで館にいて、西の反の警官と連絡、情報キャッチに勤める。

富豪黒沢家では黒沢佐左衛門、同陸之助が同行し、下男と黒沢和市の二人を警察官に伺いに出している。

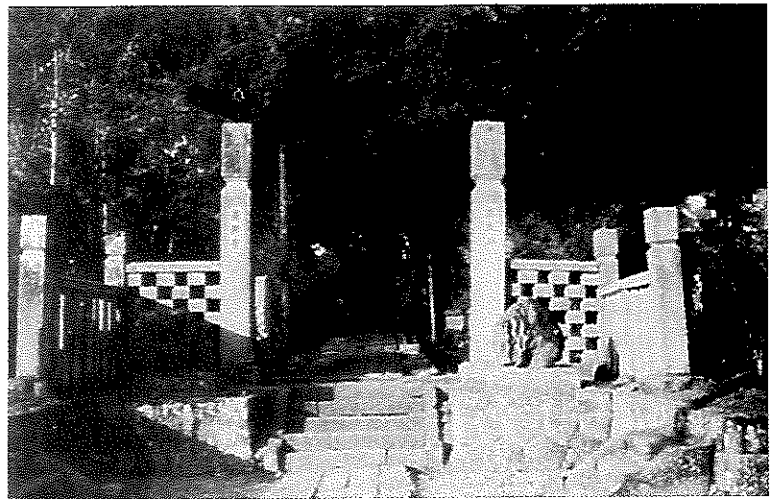
海瀬村では、刀や棒をもって、大落沢に数百人集まって、篝火（かがりび）を焚いて官民一帯で防ごうとした。

高野町では郡書記鷹野齊がきて、西の反で防ぐから至急村民を差出すようにと命令した。

警察からの訓令で、飛道具や刃物をもって撃退しようとしてはならないと通知があつて引き揚げた。

海瀬村では書類を繭立袋にやたらに押しこんで封印をして民家の土蔵にかくした。

8日穂積村戸長井出要蔵は、朝初の窪尾根<sup>しよのくぼ</sup>へ上って、暴徒が親沢方面にいかず、ダイラ溜池に押し出したのを確認して、筆生以下4人に不和雷同することのないよう、村民にふれさせ、じぶんは郡役所へ通報しようと海瀬方面にくだった。



竜興寺

## 困民軍の活動

8日困民軍は大落沢から2手に分かれ、本隊は抜井川を渡って海瀬へ、一隊は段丘上を館から崎田へ出た。



高野町の通り（現在）

本隊は四ッ谷竜福寺に本陣を置き、四ッ谷、岩水に炊出しさせ代金を支払う。戸長役場はからっぽで人足徴発はできなかった。

「戸長のいる所を教えたものには金をくれる。かくして置けばこの村に放火する」戸長佐塚甚三郎は井出甚平家の表二階の塗物戸棚の中にかくれていた。

相馬の酒屋で炊き出しをし、酒を振舞った、不和随行者が多くなった。

旧知の菊池貫平に会いにいくと、今般貧民救助の策にはかならず、一戸一人ずつ応援をして御尽力願いたしとのこと（秩父兇徒聚衆実

見談 自編作)

朝野新聞の「天の斯の民を生ずる…」という貫平の演説は明らかでない。

宿岩村及び高野町村戸長井出勤十郎は、いったん役場を閉鎖したが海瀬村のようすをみて、かえって放火乱暴される恐れがあると、役場を開いていた。

困民軍の横田周作、村竹茂市ら10数名は、梓山から臼田分署に急行する早川警部補と巡查

7名を宿岩たんぼで急追した帰り午後4時ごろ高野町役場に踏みこんで、強談し人夫を強要したので、召集して置いた村民70~80人を随行させた。畑村役場には誰もいなかった。

崎田に向かった一隊新井寅吉、同貞吉ら引率、高見沢勝五郎宅打ちこわし、145円、刀10、槍1、内津忠助34円60銭、刀3、境田黒沢利左衛門150円、刀8、銃1、東山銀行すっかり片づけられていた。樋口出浦竜太郎刀2。

東馬流に宿営、井出直太郎宅を本陣とする。畳をあげて両側に重ね、奥の上段は参謀室、中の間、茶の間は幹部室、困民軍総勢400人位、道路や空地に焚火し、家宅侵入や強奪はなかった。島屋、万屋では白木綿が売り切れた。白鉢巻が新しい参加者に与えられた。物品の代価は支払われた。



商店のあった西馬流

#### その夜の困民軍の活動、打ちこわし、駆りだし

小海村戸長、黒沢市治郎宅打ちこわし、箆笥、長持、若妻の衣裳まで焼く、酒だるをこわす、飲んだ村人は後日罰金刑。大洲の湯は市治郎の父、黒沢市右衛門の経営で焼却、西馬流商店は市治郎の弟、黒沢文三の経営、家財は千曲川原で焼却、打ちこわし。北相木村三寸木、白岩、下新井まで駆りだした。代吉は駆りだしにきた凶徒の呼び出しに応じ、帯刀して出て、村民を村内明神の森に勢揃いさせ、小海原を経て海尻まで進行した。高見沢薫は拒否したが脅迫され随行したとある。南相木村戸長中島嘉伸に全戸1人ずつの人足を強要した三川や上栗生まで駆り出している。小海原から海尻にでた。後この村は自首者231人に及んだ。処断者181人、軽罪50銭~2円

## 困民軍壊滅11月9日

### 東馬流の血戦

未明、下海瀬村土屋忠左衛門方へ打ちこわしに向かった困民軍の一隊は、高岩を過ぎシャグジの横手で北進してきた軍隊と遭遇して逃げ帰り、東馬流の本営に急報した。

両軍は天狗岩前面の千曲川にかけられた棚橋をはさんで撃ち合いとなった。

先夜岩水で仮眠をとった軍隊は、二手に分かれ、江口少尉が兵40人警官30余名を率いて四ッ谷竜福寺付近の高野町橋を渡って甲州街道を南へ進み、吉屋大尉は兵80人警官50余名を率いて千曲川を南進して困民軍と遭遇し、天狗岩棚橋を前に砲戦となった。

川西の甲州街道を進んだ江口少尉は宮下から南原の台地（現在小海高校敷地）端を姥が淵の上に出て、東馬流の困民軍本営を目ざして一齐に銃撃をはじめた。吉屋大尉はこの期をとらえて突撃命令を発した

流弾による、いたましい犠牲者となったジャウの慰霊祠



ので、前後から挟撃された困民軍はたちまち敗走した。官軍を先導してきた穂積村戸長井出要蔵は5時ごろ砲撃がはじまり、7時ごろには静まって、官軍巡査は追撃に移ったと記している。

困民軍は、菊池貫平、新井寅吉、横田周作らの幹部の多くは、ここから姿を消してしまった。東馬流下田圃の筆岩道の端に最初の死体があった。村の入り口にも死体があって、頭骨砕けて脳汁が出ている、胸を撃たれ、鮮血が地面を染めている。それから5～6歩でまた死体。人家の西方に2人、人家の庇（ひさし）に1人、村中に3人、村下に3人と合計13人、いずれも銃丸に撃たれ、刀で斬られていて思わず胆を冷やす思いであったという。

死者のうち4人は高野町村3人、大日向村平川原1人で、佐久の人たちはそれぞれ遺族にひきとられた。高野町の3人は倉沢米吉、高見沢儀四郎、日向留作の人々である。残る9人は秩父や群馬県の人たちで、検死の後、東馬流の人々のはからいで、諏訪神社境内の一隅に二つの墓穴を掘って埋葬された。その後50年、昭和8年に菊池貫平の孫たちによって「秩父暴徒戦死者之墓」の墓石が建てられて現在に及んでいる。

東馬流井出宗作の妻ジャウ（30才）は避難中官軍の流弾に当たって死亡した。これはいたましい犠牲者であった。

困民軍敗走直後、憲兵20数名が東馬流に到着した。憲兵少尉隈元実道氏指揮下の小隊のうちの半隊で、憲兵軍曹中村匡行これを引率し、吉屋大尉と打ち合わせ直ちに追撃に移っていった。

吉屋大尉は土村に駐屯所を定め、番兵数名を留めて、警察隊と共に海ノ口に向かって進発していった。

警察本部を臼田に移し、糧食本部を土村に移してきたので土村は大変な混雑となった。

東馬流を脱出した困民軍はスバリー小海ー小海原ー大坂ー海尻のコースをとった。

相木方面から駆り出された参加者たちも小海からこの道をとって合流した。

10時ごろ困民軍100人位が、大坂峠から海尻へ入ってきた。炊き出しと人足を要求したが、人足若干名を貸すと海ノ口に向かっていった。まもなく憲兵隊が土村から東通りに向平から海尻に入ってきた。このとき村人が大月橋の上に見張りが2人いると指さした。憲兵隊付巡査粕谷清五郎と憲兵卒矢野龍宣が橋際に進んで、矢野憲兵卒が銃口を向けて誰何すると、一人は逃げ、一人は槍をふるってかかってきたので粕谷巡査がこれを遮り戦って斬殺した（井出英作氏不染随筆には憲兵隊付岡田照智巡査が斬ったと記している。）この困民軍戦士は小島の共同墓地に村人によって葬られたが、現在その墓は定かでない。憲兵が問屋で立ちながら食事をしているとき、「大坂上に暴徒見ゆ」と報告があった。憲



東馬流の困民軍本陣となった井出家（現在）

兵は箸を置いて二手に分かれ、千曲川の向い橋を渡り、宮の久保に進んで発砲したので四散した。相木方面から駆り出されたうちの一隊であった

憲兵は海尻で馬を雇って、乗馬で海の口に向って追撃していった。

**海の口戸長有坂小三郎は重要書類を民家の土蔵に隠した。**10時ごろ200名ほどの困民軍がきた、旧会津藩士河原角太郎と名乗って昼飯200名分の炊き出しを要求した。昼食のようすをみると巨魁らしき者は60名位で、他は北相木地方のものと思われた。

食事を終わると一戸一名ずつの人足を強要して、野辺山原に向かって出発した。

困民軍が出発するとすぐ憲兵8人（憲兵軍曹中村匡行外）が騎馬と徒歩で駆けつけた。新道を走る困民軍に対して、戸長が憲兵を誘導して、旧道から回って新旧合路で、かけつけた村民に鯨波をあげさせ、憲兵がはげしく銃撃したので、困民軍は荷物を投げだして、広瀬、川上、野辺山方面に向かってそれぞれに逃走し、困民軍はまったく壊滅して10日間にわたる戦いの幕を閉じた。東馬流からここまで統率してきたのは坂本宗作と会津の先生（稲野文治郎）であった。

**憲兵と憲兵隊づき巡査は全員海尻から駆けつけると残党を捜索しながら大明村（現樋沢）に至って宿泊した。**

**10日、大明村を出発した憲兵隊は居倉、秋山と進んで残党数名と金、銀、刀、槍を獲、秋山村では捕虜9名を領収したとある。**梓山村につくと、秩父郡中津川方面から挟撃態勢をとって進んできた、土屋憲兵軍曹の率いる憲兵半小隊と出会した。翌11日 憲兵隊は十文字峠を越えて三峰村に向かった。

高崎鎮台第二中隊長吉屋大尉は、東馬流の戦闘後、海の口を経て広瀬に進んで屯営し、10日には北相木に向かった。

高崎鎮台本城大尉の率いた第一中隊もこの日海の口に到達したが夜は豊里村馬流に向かった。

軍隊警察官の行動に伴って、小海村土村には糧食本部がおかれ、海の口、広瀬、相木方面の官軍へ食糧の補給、輸送が行なわれた。また新津潤五郎宅に仮病院、警察署が置かれ、相木方面の捜索が厳重に行なわれた。

**南佐久地方の秩父事件関係の検挙者概数は**大日向60人、海瀬10人、高野町44人、穂積2人、小海32人、南相木200人、北相木184人、宿岩15人、その他で558人にのぼっている。

菊池貫平は逃走中欠席裁判で死刑を宣告され、井出為吉は軽懲役8年、高見沢薫は重禁固1年6月であった。

**秩父事件の責任は誰が負うべきか**—早川権弥の日記—東馬流ニ達セントシテ入口ニ到レバ一個ノ死体アリ。数十人困ンデ之ヲ見ル。頭骨碎ケ脳汁出デ、胸撃タレ胞切ラレ、鮮血地ヲ染テ寒風声アリ、七、八歩マタ死体アリ、面部刀痕アリ、骨部切ラレテ血シホ流ル、五、六歩スレバ又死体、尚又西ニ死体アリ、是ヨリ人家ノ西ウラ弍個、村中ニ三個、人家底シニ一個、村下ニ三個ノ死体、合セテ十三人、何レモ銃丸ニ撃殺サレ、且刃傷ヲ蒙リテ骨折ヲクダカレ斃ルルアリ、脚部ヲ撃レテ死スルアリ、一時流血、淋漓タリシハ、修羅ノ巷モカクナルカト、思ハズ心胆ヲシテ寒カラシム、嗚呼慘ナル哉、又実ニ忍ビザルナリ、今ニシテ暴徒ト呼バルルモ、昨日ハ三千余万ノ同胞ナリ—（中略）—而シテ敢テ以テ此事ヲナスハ抑モ何ノ故ナルカ—中略—一昨十五年ノ交ヨリシテ物価次第ニ底落シ、年一年ヨリ、月一月ト愈々益々窮迫シ—今ヤ家財・田圃ヲ挙ゲ尽シ以債主ニ答ヘントス、—妻子多シト雖モ、今ハ路頭ニ流離シテ寒風ニ単衣モ能ハザルアリ、且(アシタ)ニハ霜ヲ踏ミ、タニハ露

ヲ分ケ、終歳伛僂シテ止マザルモ、既ニ現時ノ死地ニ殞スー（中略）ー天下ノ人ヲ拳ゲテ此極ニ陥ラシメシハ抑モ誰ノ任ナルゾ、自ラ作セル災ニモ非ズ、天ノ作セル災ニモ非ズ、一箇ノ政府ナル者アリテ官人預ッテ之ヲナスー人狂者ニ非ザルヨリハ何ゾ好ンデ骨ヲ山野ニ晒スベキ人真誠ニ窮迫スルニ非ザルヨリハ、何ゾ好デ蓆旗ヲ拳ゲン、今日ノ暴発ハ蓋シ原因ノアルナルベシー一念注ギテ此ニ到レバ涕淚又忽チ雨ノ如シ、悲哉悲哉、嗚呼今ニシテ為ス事ナクンバ後來ヲ如何ンー戦闘死傷ノ人ヲ視テ感慨ノ心抑ヘガタク、記シテ以テ後日ニ伝フ。

**秩父事件の本質**は明治政府の急速な近代化政策＝富国強兵策の中で、犠牲を強いられた農民がじぶんたちの生存権を守るために、自らの意志で組織をつくり、要求綱目を掲げて起ち上がった権利実現のための戦であった。

政府は、この農民蜂起を最も恐れて、内務卿山県有朋は、東京、高崎の鎮台兵、東京憲兵隊埼玉、群馬、長野県等各県の警察軍を大挙して繰りだし、陸軍の最新鋭武器である村田銃をはじめ、この秩父事件の戦闘に使用して、徹底的に討伐し、その根を刈りとりてしまおうとしたのである。

**裁判所**もまた、容赦なく厳しいものであった。

裁判所はこれを不平の農民、博徒獵師、浮浪の徒が集団を組んで、官吏を殺害し、富豪を襲って放火掠奪をほしいままにした恐るべき暴徒として処断した。

**事件の関係者、遺族**たちは、こうした不当の差別感に堪え、忍んで生きなければならなかった。

**東馬流諏訪神社の東南隅に埋葬された9人の困民軍戦士の墓**は草に埋もれて詣でる人の影とでもなかったのである。それから50年後の昭和8年、この戦闘の主動者菊池貫平の孫一同の名によって、空しく眠る戦死者の霊を供養するため、その埋葬の地に「秩父暴徒戦死者の墓」の墓碑が建てられた。（表紙写真）碑面の文字は困民軍が本陣を置いた井出家の当主井出直太郎氏の筆になるものである。

事件後90年を経過した頃から「騒動」「暴徒」として恐れられて、かえりみるものもなかったこの墓に、ようやく参拝者、見学者の姿が多くみられるようになった。

最近秩父事件遺族会等の手によって草の根を分けるようなきめこまかな調査がすすめられているにもかかわらず、ここに眠る9人の困民軍戦死者の氏名を明らかにする作業は難航している。「暴徒」に対する恐怖の感情をいかに強く植えつけられていたかを思い知らされ、遺族の置かれた長い苦しみを推察するに余りがある。

秩父郡風布村の大野喜十郎という当時20才の青年らしい困民兵が銃を抱えたまま死んでいるのをみた者がいたというのが、遺族には告げられず、若い妻も幼い長男を残して、どこへか去ってしまった。最近心ある人の手によって東馬流の「秩父暴徒戦死者之墓」からひと握りの土が秩父に持ち帰られたという。

**悲しき犠牲者井出宗作さんの妻ジャウさん**（30才）の慰霊祠は、事件後有志総代井出喜平氏ら親類縁者や土地の有志者によってつくられた。小海線馬流駅の東方山腹の石造慰霊祠の前に立てば、かつての古戦場が眼下にひらけ（表紙写真）、明治17年11月9日の暁天をついて行なわれた凄惨な戦闘の有様が目に浮かぶ。日本人どうしのこんな戦いが二度とあってはならないのである。

**百年前、困民軍が命をかけて戦った行動の意味**を今日の私たちが真剣に考えてみることは、これからの日本人の運命にもかかわることであることを忘れてはならない。

昭和59年11月9日「秩父暴徒戦死者之墓」の前で約百人が集い、秩父暴徒汚名返上百周



年墓前祭が行われた。「今日からは暴徒ではない真<sup>まこと</sup>の自由民権運動の戦士である」と皆がそれぞれ萬感の意を込めて合掌した。

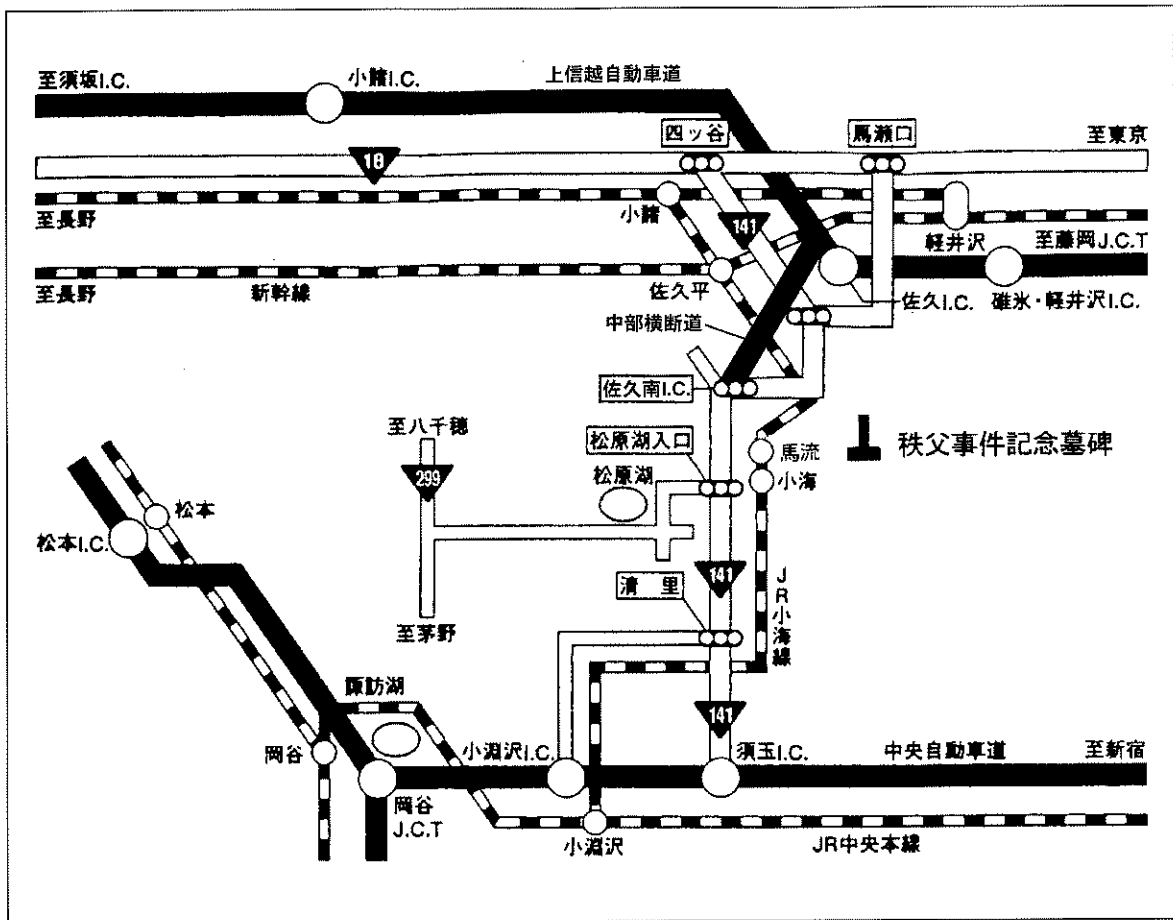


墓建立の経緯



JR東日本労組の顕彰碑  
(埼玉県旧風布村と東馬流の2箇所に建立された)





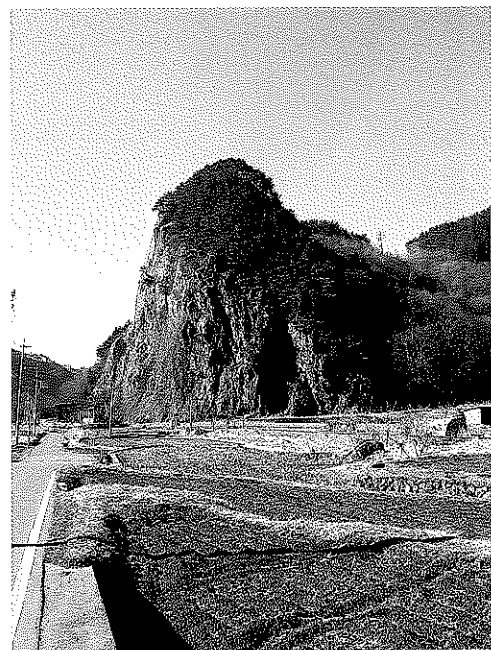
### ■交通のご案内

JRをご利用の場合：JR「佐久平駅」または、JR中央本線「小淵沢駅」より小海線にて「馬流駅」下車。駅前からは、徒歩2分。

車をご利用の場合：中央自動車道「須玉I.C」または、中部横断自動車道「佐久南I.C」より国道141号線を経て、東馬流橋へ入る。



JR小海線馬流（まながし）駅



当時は棚橋があって砲戦が行なわれた天狗岩